

世界の段差に肌を晒す

—アフリカ・マリの旅行から

稲 賀 繁 美

西暦二千年二月、サハラ砂漠南のマリ共和国を訪れる機会を得た。早朝パリからブリュッセルを経由して、サベナ航空機を使うのがお決まりだ。イニシャルを頭文字にすると「こんな悪い経験は二度と御免」という（政治的に正しくない）陰口の英語になるので（悪）名高いこの航路からも、旧植民地宗主国の影響力は歴然としている。幸い当日はアルプス以南は快晴に恵まれ、ジブラルタル海峡を上空から克明に観察できた。かつてサンテールグジュペリらが辿ったアフリカ西海岸の郵便航空路をなぞり、やがて大西洋に別れを告げて、灼熱のサハラを一気に南下する。さらに数時間を経過すると、樹木が点在し始め、ほどなく広大な乾季のニジェール河流域が、眼下にその姿をあらわす。外交特権を盾に、書類審査もやり過ごし、夕刻、首都バマコに入る。赤土の地表が目射る。宿舎は市内唯一の十階建、友愛ホテル。宛てがわれた室

内から眼下のブルを見下ろすと、なにやら見覚えのある巨体が、夕日の中で水泳を楽しんでいる。一足さきにエール・フランスでご到着の、ウンベルト・エーコだった。

背景から説明したい。八十年代後半にボローニャ大学の記号学者 Umberto Eco、バリの人類学者 Alain le Pichon を中心とする小規模なグループが相互人類学 anthropologie réciproque の提唱のもと、非西欧から若手の研究者を招いた。これまで通常の人類学調査は、西側学術世界の流儀でその外部を記述することをもって「科学」と称した。そうした伝統に対抗して、まず非西欧出身者たちに、自分たちの文化伝統にそってヨーロッパを記述してもらおう。続いて欧米流と非欧米流の両者の体験を突き合わせて検討しよう、という目論みだ。いささか楽天的にも見えるが、一見単純なこの目論みも、実現するのは予想外に困難だった。中国は広州、中山大学から招かれた王賓が逆にイタリアの客人たちを広州に招いたのは、ようやく九三年。天安門事件によって計画は大幅に遅延した（その詳細は東北芸術工科大学『ARS』三号参照）。それから六年後の昨年、日文研で開催した第十四回国際研究集会「文化の越境——異文化理解の倫理にむけて」が日本での返礼。これに続き、今回ようやく、西アフリカはマリ出身の社会学者、Moussa Sow が、母国マリでの研究集会実現に漕ぎ着けた。題して「トゥンブクトウの徴のもとに……相互認知の道程——文化的多様性と世界一元化」。

首都バマコでの開会式では、(1)他者の眼差しの記号学、(2)世界一元化 (mondialisation) 状況下での文化財の循環、(3)世界一元化の過去と現在……歴史研究・考古学研究の教訓が、今回の会議の主題として提唱された。(1)がウンベルトの意向を反映しているならば、(2)は目下パリで人類博物館の改組に伴い、開館準備中のグランリール美術館企画責任者、Germain Viatte やイスラエルから参加した彫刻・環境藝術家、Dani Karavan らの関心に対応し(3)が地元バマコ美術

館の Samuel Sidebe、歴史家の Doulaye Konaté、トゥンブクトゥの文化財保護に関与している Sidi Mouhamed Ould Youbba, Ali Iuld Sidi らの利害を代表する。アフリカと欧州という軸に対して第三項からの三角測量を齎すのが、異色の中国学者 Philippe Julian や Steven Shankman のような比較文学者とともに、中国から参加の Wang Mingming や小生の役割。さらに記号学の立場から Jurdant Boudouin、科学基礎論の Ivar Ekeland、ドゴンの研究で知られる Jacky Boujir、コンゴでの教鞭体験から欧州の価値観の押し付けに疑問を抱いた Mineke Schipper、欧州連合委員会から派遣された官僚で、物静かな理数肌ながら実はボルヘスの甥で恐るべき洞察力を発揮した Gustavo Martin Prada らの学際的参加があった。

会議そのものについては、発刊予定の報告書に譲ろう。また筆者はモプティでの最終会議の席で、議題三点に関しての総括を行ったが、これも別途発表の予定である。ちなみにニジェール川大湾曲部の民族学的研究に関しては、近年川田順造氏を代表とするマリと日本の共同研究があり、その充実した成果は日本語一巻のほかフランス語でも三巻の報告書として刊行されている。この国際的共同事業は、現地の参加者からも高く評価されていた。川田氏自らも、欧州とアフリカの二極対比となりがちな南北関係に、アジアという第三項を導入させることの必要を説かれている。その主張は、近年『リベラシオン』紙などバリのメディアでも大きく取り上げられた。だが筆者には、その尻馬に乗るに足る専門的知識など、もとより備えがない。現地は経済的に世界最貧国のひとつと目されている。そこに「學術派遣」された自分は、周囲から何を期待され、周囲にどんな影響を及ぼすのか。そもそも學術的研究という土俵は、いかなる力関係のうえに成立し得ているのか。その実体験に徹してみた。

首都バマコでの会合に続いて、プロペラ機で空路二時間トゥンブクトゥに向かう。小さなバ

ラック同然の空港は、砂漠のなかに孤立しているが、着便があるや、土地の若者たちが、お土産売りで押しかけるのは、首都バマコ空港の場合と変わらない。ジープで運ばれてホテルに到着すると、入り口にはさきほど空港で出会った子供たちが、もう先回りして待っている。真っ青な衣装に身を固めたトゥアレグの人達と、土地の子供たちのあいだには利害の対立がある様子で、城壁のように壁で囲まれたホテルの入り口の周囲では、客獲得の優先権を巡って暴力沙汰も頻発する。銀細工の装身具や煙管を売るおじさんや、ビーズ細工の腕輪を売る青年。タバコ入れや刃物、またトゥンブクトウの十字架として知られる首飾り、黒壇の簪、さらにはサンダルや袋といった革製品、貝殻の首飾り、さては発掘品めかして錆びを効かせた鋳物の塑像、木彫りの彫刻まで。木彫りはドゴンの村で買えとか、布製品ならニジェールの宝石、アフリカのヴェニスの異名を取るモブティで入手せよとか、ブルの革製品なら穴場はウチだ、銀製品ならアトリエを訪ねてくれ、と観光客相手の商売熱心はいずれも同じ。

おもしろいのは、こうした少年たちのなかに、必ずたいへん聡明な子が交じっていることだ。どうせホテルで換金をした段階でこの客がいくら西アフリカ・フラン（セーファーと称する）を持参しているかは、筒抜けだ。いまさら現地の観光公害を嘆いてもしかたがない。我々観光客がその元凶なのだし、その観光客に立脚した経済が現地の現実を成しているのだから。それが礼儀なら、午睡の時刻には砂漠の片隅の木陰で、涼風に吹かれながら、取引を口実に、こうした商売人たちと、じっくりねばっておしゃべりすることにした。北アフリカ同様、先方の言い値に文句を付けて、当方の値段を言い、再度先方の提示する額でまともれば商談成立、さもなくば、というのが基本。だが、このルールに乗ったのでは、地元の相場からすれば法外な出資となる。だが、この規則に乗らないのなら、その理由を先方にきちんと伝達しなければな

らない。大人たちは自分たちの規則に拘泥する。青年たちは、自分たちがいかに年上の親方たちに搾取されているか、と窮状を訴える。だが割こんでくる少年たちのなかには、こちらが条件を出すと柔軟な対応をしたり、フランス語が不自由な大人とのあいだの通訳を買ってでて、あいだを取り持つ、有能な媒介役が必ず現れる。その瞳が美しい。

もちろん子供たち同士でも、通訳の役回りと、がき大将的なボスとの役割分担はできている。客のまえで一見互いに諍いを起こして見せても、裏ではあらかじめ打ち合わせが成り立っていたりする。それを見据えたうえで、わざと騙されてみたり、裏の事情はお見通し、と見切ったりしながら、商売とは関係ないかれらの日常の生活の様子を少しずつ聞き出してみた。トゥンブクトゥの屋下がり、ドゴンの村で市の立つ午後とともに、一番時間が取れたのは、おりからの砂嵐のために飛行機の発着が半日遅れたモブティ空港だった。子供たちの年功序列やマーケットでの優先順位は尊重したうえで、別に購入する意図もない品物をダンに交渉を装っておしやべりを続けると、やがてかれらの希望、夢そして現実が見えてくる。

周囲のヨーロッパ人たちは、外国人用のお土産など買う意志はない、などといかにも知識人らしいそっけない態度で土地の子供たちのおしやべりを切り上げる。それをはた目にしながら、地べたに座り込んで、埒のあかない屁理屈を捏ねていた。まわりの白人連中はどうしてシゲミはどこにいても現地の子供たちにあれほど人気があるのだ、などと訝しがっている。当方はただおしやべりが楽しいから、商売とは無関係な質問ばかりを重ねていたのだが。ニジェール河の穀倉地帯ゆえ、生活に必要な食料は、稲作を含めて保証されている。雨季と乾季に分れるサバンナではあるが、エチオピアの周辺のように飢餓に襲われることは少ない土地である。ニジェール河で取れる通称キャピテースという白身の魚、トゥンブクトゥ特産の直系が二〇セ

ソチはありそうな球形のパン。ドロリとした緑の野菜のソースを懸けた、ハクホエというソングアイのご飯や、北アフリカからの影響の見えるクスクス。そうしたご馳走に毎日預かったのは無論客人の贅沢だ。だが生活必需品をひとつ離れると、外貨なくしては何一つ購入できない。ボールペンや色鉛筆、サインペンやノートなどの文房具は、土地の子供たちには垂涎の貴重品なのだ。ましてや、空港でのお土産売りの出稼ぎに日々を費やす子供たちにとつて、飛行機に乗ってゆくヨーロッパとは、夢のような憧れの土地だろう。ブリュセルやパリにも増して、どこにあるのかは想像もできないが、結構な数の観光客がやってくるトーキョーという名前も、彼らの夢想の地図のなかに、しっかりと刻まれている。

「パリのフランス語」をしゃべれるジャポネなんて初めてだ、という評価を、あちこちで戴いてしまった（フランス文化圏の価値観の刷り込みだ）。ニホンジンは優しくてサイフの紐もゆるいけど、言葉が不自由なので、話を通じないのが残念、と少年たちは不平を漏らす。自転車欲したい、バイクが欲しいというから、なぜ自分の町で作らないの、と問い返す。住所を教えておいたら、高価な航空便の切手代金ものかは、何通もの手紙が、帰国後の当方を追いかけて来た。封を切ると、まだ十代はじめというのに、立派なフランス語、立派な文字である。正直いって、封を切るのは、楽しみというよりは苦痛だった。そこに封印されている世界の落差、電位差といったものが、封を切った瞬間に、突風のように吹き付けて、彼らの言葉がこちらの心にぐざりと刺さるのだから。でもその風圧を丁寧を受け止めることが、自分にできるせめてもの義務ではないのか、と思うようになってきた。翻って、なんら目的意識もなく、向上心も将来への夢もないままに小中高と進学し、親の言うままに大学を卒業して入った社会に、いわれなき不充足感を抱いている日本の若者達が、かえって不憫にも思われた。

どうすればアフリカの未来を担う若者たちに、その可能性を発揮する場を与える手助けができるのか。そしてどうすればそうした有意の青年たちと日本の若者たちとに出会いの機会を設けることができるのか。そんな思いそのものが、とてつもない傲慢であることは重々承知のうえで、貧富の格差のもたらす不条理が、やるせない。「富国徳」への道は険しい。

稲賀繁美

「日本人はなぜ外国語ができないか」図書新聞 二四五八号 一九九九年一〇月二三日付

*“The Making of Hokusai’s Reputation in the Context of Japonisme,” *Proceedings of The Third International Hokusai Conference in Obuse*, Obuse, Nagano, pp. 57–62

「ポール・ゴーッムとアフリカ美術」『視る』京都国立近代美術館 三八五号 五一七頁

*“The Painter who disappeared in the Novel: images of an Oriental Artist in European Literature,” Martin Heusser, Michele Hannoeh, Charlotte Scholle-Glass and David Scott (eds.), *Text and Visuality*, Amsterdam, Rodopi, pp. 117–127

*“Between Revelation and Violation: Ethics of Intervention,” Crossing Cultural Borders: toward an Ethics of Inter-cultural Communication, IR-

CJS, Nov. 10-13

「太平洋の島々における多文化主義の可能性」図書新聞 二四六二号 一月二〇日付

*『絵画の東方—オリエンタリズムからジャポニスムへ』名古屋大学出版会 四八〇頁

「郷愁の旅路—日本と「西洋」を往還する旅路」比較文学研究 七五号 一六七—一七二頁

「臨時教育審議会管束後の一般教育改革」『三重大学五〇年史』五七二頁

「いまなぜ越境か—問われる異文化介入の倫理」京都新聞 一二月一六日付

「遠近法 日本でアレンジ」讀賣新聞 一二月二〇日付

*“A Vision of the Dividable Self in Contemporary Japanese Comics,” *The Imagination of the Body and the History of Bodily Experience*, IRCJS, Jan. 18-22

「マラー—『大地の歌』を巡る東西の出会い」図書新聞 二四六九号 二〇〇〇年一月一五日付

「第一四回国際研究集会」*Nichibunken Newsletter* Nr. 37, pp. 3-4

*『《他者》としての「美術」と「美術」の《他者》としての「日本」—「美術」の定義を巡る文化摩擦』島本 流、加須屋誠（編）『美術史と他者』晃洋書房 一五二—一九二頁

「文化摩擦の功罪：交流四百年記念日蘭交流史研究ワークショップから」図書新聞 二四七三号 二月一二日付

「文化の越境：不可触の傷口に触れること」図書新聞 二四七五号 二月二六日付

「在外研修の報告」日文研 二〇号 四七—五一頁

『革命家』セザンヌ像の形成—誤訳から生まれた後期印象派理解—中日新聞 三月一日付

*“Confession and Exposure: Nagasawa Mitsuo’s *Adult Video Actresses* and Japan’s Male Intellectual Consciousness,” *Proceedings of the Midwest Association for Japanese Literary Studies*, Vol. 5, pp. 19-45

*“The Making of Museums and Collections in Modern Japan,” *Interpreting Asian Cultures in Museums, Displays, Activities, Strategies*, International Workshop, 15-17 March, The British Museum